

大学図書館 新たな活気

表題と写真は日本経済新聞 1月26日による。まずはリードから一大学図書館が変貌を遂げている。かつての閲覧室で一人黙々と本に向かう重々しい雰囲気からは一変。今は従来型の閲覧室のほか、学生が声を出して活発に議論したり、教員が論文の書き方や学習方法などを指導したりする。大きく変わりつつある大学図書館の現状とその背景を探った。

退職してから、名大図書館などを活用させてもらうことが多くなった。図書館にたいして関心が高まり、この記事に目がとまり、レポートに取りあげることにした。



写真のように、東京経済大学の新図書館には、学生が気兼ねなく議論できるグループ学習室が8つある。学習室は「夕方になると予約を取るのが難しい」ほどの人気だという。記事では、論文の執筆や発表についての技術習得を支援する機能、指導教員の仲介なども紹介している。

よく利用している名大中央図書館には、2階に「ラーニング・コモンズ」という広いスペースがある。学生がホワイトボードなどを使い熱心に議論している。昨春、図書館に初めて行った時、なんと騒々しいことかと思ったことがある。2階フロアは、学生が活発に議論する場として設定してあると知り、図書館機能の変化を実感したものだ。まさに「大学図書館 新たな活気」である。

大学図書館ではないが、先日レポートでも書いたように、名古屋都市センター「まちづくりライブラリー」をよく利用している。まちづくり関係の専門図書館として、多くの人が利用している。都市計画やまちづくり関係の図書・雑誌が充実しており、それを写真の机でじっくり読む。ここでの楽しみは、なんといっても12階の窓からアルプスの山々を見渡せることだ。この日も御岳が正面に見える席に陣取り本を読んだ。御岳がひととき美しく見え、つい本よりも外の景色に目が行ってしまった。



(2015年2月1日)